

『ミヤコ』 - 秋田望

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

それはまだミヤコが幼稚園に通っていたころのことです。
ある日、ミヤコが道端で遊んでいると、ミヤコと同じくらいの年齢の女の子が近づいてきて言いました。
「こんにちは。あたし、ミヤコっていうの。はじめまして」
よく挨拶の出来る子でした。
「こんにちは。あたしもミヤコっていうの。はじめまして」
舌たらずな声でミヤコも言いました。二人は、互いがどのような人間なのか、楽しく語り合い始めました。野球が好きだとか、ブランコが大好きだとか、でもうんていが苦手だとか……そんなとりとめもない話です。でも、お互いのことをよく知って、仲良くなるためには重要なのでした。
すると、二人のすぐ前の家の窓が開いて、ミヤコと同じ位の年齢の女の子が顔を出して言いました。
「あたしもミヤコだよ」
今度はお母さんと一緒にお散歩していた双子の姉妹が走ってきて、声をそろえて言いました。
「あたしたちもミヤコっていうの」
すると今度は公園から女の子が走ってきて——今度は車の中から顔を出して——次は二階から飛んできて——はたまた読書をしていた顔を上げて——あっという間に、ひい、ふう、みい……十人ものミヤコが集まりました。
「あたしもミヤコ」
「あたしもミヤコ」
「あたしも……」
……………
ミヤコたちは言い合います。
はじめは面白がっていたのですが、だんだん変な気持ちになってきました。
「ねえ、どうしてあなたはミヤコなの？ どうしてあたしもミヤコなの？」
「どうして？」
「どうして？」
何なのでしょう。自分が自分でないようなこの気持ちは。ついさっきまでお父さんとお母さんとに愛され、大切にされてきた、かわいいはずの自分はどこに行ってしまったのでしょうか？
なんだか、突然ひとりぼっちにされてしまったような感じがしてしまうのです。周りにはこんなにも人が——それも自分と同じ状況の人がいるというのに。
なんで？ どうして？ あたし、いい子にしていたよ？ お母さんの言うこと、ちゃんと守ったよ？
なのになんで？ どうしてあたしのことひとりぼっちにするの？
さみしいよ。ついさっきまで楽しくしていたのに。
あたしはミヤコで、お父さんはお父さんで、お母さんはお母さんだったはずなのに。
信じていたのに。——どうして？
とうとう、何人かのミヤコは泣きだしてしまいました。声を上げてなくミヤコもいればすすりあげるようにして泣くミヤコもいます。
でも、泣いていないミヤコもいます。
「あたしは泣かないよ。だって、悲しくたって泣いちゃだめなんだもん」
すると、すすり泣きしていたミヤコの一人が言いました。
「えらいね。ミヤコちゃんは、泣かないんだね」
「うん」

それを聞いていた、声を上げて泣いていたミヤコたちは、泣くのをやめようと、がんばり始めました。顔を一生懸命ぬぐって、息をこらえて、声を抑えようとします。でも、涙は止まりません。

それを見ていた、泣いていないミヤコの一人が言いました。

「いいんだよ、ミヤコちゃん。泣いたって。泣くのが悪いんじゃないからね」

こらえきれなくなって、またミヤコは泣きだしてしまいました。でも、さっきとは泣き方が違います。声も小さく、なんだか落ち着いてきているようでした。

やがて、

「あたし、あたしね……」

女の子の中の一人が言いました。

「あたしは、ミヤコっていうの」

すると、何人かの女の子たちが続きました。

「あたしはミヤコなの」

「あたしはミヤコって名前なの」

そして、女の子たちはやっと分かったのです。

「あたしはミヤコ」

[戻る](#)